

第 57 回 H. オーバーマイアー協会大会に参加して

小野 昭

2015年4月6日から11日まで、ドイツのハイデンハイム市のコングレス・センターでオーバーマイアー協会の年次大会があり、テュービンゲン大学のN. コナード教授に招聘されて参加した。この協会は、ドイツの著名な考古学者ヒューゴ・オーバーマイアー Hugo Obermaier (1877-1946) を記念して1951年に創設された。事務局は現在エアラゲン・ニュルンベルク大学の考古学研究所にある。機関誌「第四紀」Quartärも編集体制を一新し、投稿論文の半数以上は英語になった。

この協会の年次大会は、伝統的に大会報告とエクスカージョンの両方に力を入れドイツ以外の地域もエクスカージョンのコースに入れることが多い。今回は通常の一般発表のほか、「象徴的コミュニケーションと現生人類の文化」"Symbolic communication and modern culture"の特別セッションがあり、私はこの枠のなかのGlobal perspectivesで招待講演を依頼された。日本の考古学でこのテーマに貢献するのは実はかなり難しい。一ひねりしないと、Northeast Asian records of symbolic behaviorの演題で報告した。この特別セッションに19本の報告があり、一般報告は29本、ポスターセッションは32本であった。

会議の公用語は英語だけであった(写真1)。会議参加者は延べ200人くらいで、エクスカージョン参加者はざっと80人。ドイツ以外からの参加は3割くらいだろうか。アジアからは私1人であった。こういう分類もあまり意味はないだろうが。

報告の内容は全体的にみると旧石器時代が中心で前期旧石器から後期旧石器、中石器時代まで広くカバーされていた。若手の報告、特に印象的であったのは博士の学位を取得直後の若手の報告が多く、また女性の報告者が多く、質疑やコーヒープレイクの際の会話などもエネルギーに満ち溢れていた。報告の質も高いものが多く、うれしい気分になった。



写真2 ホーレフェルス洞窟の入口にて

ホーレフェルス洞窟(写真2)で発見された後期旧石器時代初頭のオーリニャック文化期の白鳥の骨製フルートのレプリカを作成し、現代の女性フルート奏者がいくつかの異なる吹き方で演奏する研究報告もあり、単に吹くのではなく研究報告にするところが面白い。

(次項へ続く)



写真1 第57回H. オーバーマイアー協会大会のポスター

目次

第57回H. オーバーマイアー協会大会に参加して	1
小野 昭	
オシノヴァヤレーチカ10遺跡2015年調査記	2
橋詰 潤	
隠岐島後調査における黒曜石原産地調査	3
隅田祥光	
須藤隆司センター員旧石器学会賞受賞!	
2015年度スタッフ・組織	4
2015年度スケジュール	
編集後記	

エクスカージョンはドナウ川の2つの支流、ローネ川とアッハ川が開析した両溪谷にある石灰岩洞窟が中心である。両溪谷を2日間かけて回った。第2次大戦前からここで調査を継続しているチュービンゲン大学の考古学研究所が今回の準備を担当し、会全体を組織していた。この両溪谷の後期旧石器時代の初頭は特に重要で、ホモ・サピエンスがここに到達して創出した、マンモスの牙で作った動物の小彫像（ライオン、クマ、マンモスゾウだけでなく水鳥、魚などの彫像もある）、女性をかたどったいわゆるヴィーナス、ライオンと人間の男性を合体させたライオンマン、楽器（フルート）などが世界的な注目を集めている。



写真3 市内のショッピングモールにも会議関係の展示（ケサイの親子の復元）があった

この両溪谷の旧石器時代遺跡を世界文化遺産（シリアルノミネーション）にしようとして、コナード教授らが中心となって10年以上まえから周到な準備をして、2014年にはドイツ国内での候補にすでになっている。ハイデンハイム市（写真3）、ブラウボイレン市も力を入れ、遺跡の整備、博物館のリニューアルほか、関連の施設も整備されている。遺跡の整備はいわゆるテーマパーク的に流れず、学問的な成果を十分に踏まえた正確で、過剰な推定を加えない方針が貫かれている。またフォーゲルヘルト洞窟の遺跡整備では施設が地表に突出しないよう工夫されていた（写真4）。



写真4 洞窟入口の反対側に、半地下式状に造られた小さなレストラン、売店、住居の復元などの施設

ここでの昼食は当時（オーリニャック文化期）のハンターたちにあやかっただけで、ウマのステーキの実演があり参加者にふるまわれた。世界遺産に認定されるにはここでの発掘の成果が国際誌に論文として数多く発信されている必要がある。もちろんこの基準も問題なくクリア

されるであろう。学問的にも遺跡整備でも学ぶ点が多かっただけでなく、叱咤激励される思いであった。多くの旧友に巡り合えたのもうれしかった。

オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 2015 年調査記

橋詰 潤

7月5日、ロシア連邦ハバロフスク州のノーヴィ空港に降り立った。この国に来るようになって今年で15年目になる。最初にロシアに来たのが私の初めての海外渡航だったが、その時に作ったパスポートも2代目、それも既に5年以上使用している。なぜ、私はこの地にそんなに足繁く通っているのだろうか？

ロシア極東地域アムール川下流域にオシポフカ文化と呼ばれる考古文化が広がっている。更新世末から完新世初頭の年代測定値を有するこの文化は、更新世にさかのぼる土器の存在や、大形の尖頭器、局部磨製品を含む石斧など、日本列島の縄文時代草創期前半の石器群と類似する要素を持っている。こうしたことから、日本列島の縄文時代の起源として注目されたこともあった。現在、私はこうした更新世／完新世移行期になぜこのような類似が生じたのか、さらに日本列島とアムール川下流域の間の違いは何かを探るため調査を継続している。更新世／完新世移行期には不安定な氷期から、安定した温暖期である完新世へ向け環境が激動した時期である。両地域の比較研究により、人類の環境変動に対する適応の共通性と個性をあぶりだすことが我々の調査の大目標である。



写真1 2015年調査風景

このように、個人的にはとてもやりがいを感じている仕事であるが、困難なことも経験してきた。まずは、蚊の多さである。私の調査地はハバロフスク市街から20kmほどしか離れておらず、環境としてはさほど悪くないので、もっと過酷な地で調査を行っている諸先輩方から叱責を受けそうではあるが、それでも日本にいるよりはるかに多い。今年は蚊より、やぶ蚊が多く、刺されるだけでなく時折鼻の中に飛び込み、くしゃみが止まらず難儀した。さらに、調査地によっては蛇や、クマなどにおびえなければいけないこともある。2013年にはアムール川の水位が観測史上最高位を更新し続け、それまでキャンプ地に使っていた河原が完全に水没してしまった。結果的には近隣のホテルを使用することとなったので、むしろ快適な滞在となった。普段快適な生活に慣れてしまっているので、ロシア渡航前には少しナーバスになることが多い。そんな私を見て家族は「では、なぜそんなところへ行くのか？」と疑問を持っているかもしれない。



写真2 調査中の食事

日本での発掘では経験できない（私の調査地の場合やや）過酷な環境も、普段文明に慣れて頭の中までなまってしまっている自分に喝を入れるのには最適である。こうした環境に身をさらすことが、出土遺物の分析にも生かされている。また、当地では一つの遺跡から出土する遺物が、量、質ともに素晴らしい。これは、同じ地形が何度も集中的に利用されたためであるが、日本での調査では一生に一度自らの手で掘り出せるかどうかという逸品にしばしばめぐり合うことができる。かつて人類が、過酷な環境の中それをしのぐのに適した場所を厳選した結果であろう。実際、ロシア人探検家が当地にたどり着いた際、野営地の選択に失敗して多くの命が失われており、先人の知恵と経験の深さを感じられる。こうしたことを経験できるのも当地での調査の魅力である。

今日は7月14日、帰国の朝である。これから帰れる解放感や発掘が成功した充足感もあるが、来た時よりもきつと満足した顔をしているだろう。こうして、私はまたこの地に戻ってきてしまうのかもしれない。

(2015年7月14日ホテル「ボスホッド」にて)

隠岐島後における黒曜石原産地調査 隅田祥光

2013年度から2014年度にかけて日本有数の黒曜石原産地である、隠岐島後の調査を実施しました。この調査は、島根大学古代出雲プロジェクトセンターが立ち上げた「先史時代における隠岐諸島黒曜石原産地の開発と利用に関する研究」に基づいて計画され、島根大学考古学研究室を中心とした教員や学生、そして黒曜石研究センター員によって、いくつかの新しい黒曜石原産地や考古遺跡が発見されるに至りました。

そして、黒曜石研究センターで実施した蛍光X線分析によって、隠岐島後の黒曜石は、これまで報告されている日本国内の黒曜石とは明らかに異なった元素組成を有し、さらに隠岐島後内においても、地域によって黒曜石に含まれる元素の濃度が異なるという結果が得られました。これら成果は、学会や研究論文で報告され、今後のさらなる研究成果が大いに期待されるところです。黒曜石研究センターでは、考古学的な発掘調査により得られる黒曜石製石器の原産地を、このような元素組成に基づいて推定していくための画一的な手法を模索しています。このために、地元の長野県霧ヶ峰地域だけでなく、隠岐島後、そして、2014年度からは、佐賀県伊万里市腰岳の調査を、腰岳黒曜石



写真1 隠岐島後の黒曜石露頭

原産地調査研究グループに数名のセンター員が加わって実施しています。2015年度以降も引き続き、これら地域の調査・研究を実施していく予定です。

さらに、これら活動で収集した資料を国内外の研究者が共有化できるネットワークを構築しようとしています。このために、黒曜石資料をアーカイブ化するための情報基盤の整備を進めているところです。どうぞ、今後の成果に、ご期待ください。



写真2 隠岐島後での現地調査の様子

須藤隆司センター員旧石器学会賞受賞！

センター員である須藤隆司氏は、これまでの研究が評価され、2015年6月20日から21日にかけて東北大学片平さくらホールで開催された日本旧石器学会において、2014年度学会賞を受賞しました。

旧石器学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与される賞で、須藤氏は、学会誌『旧石器研究』に会員中最多の5本の論文を公表するなど、日本の旧石器研究の中心的な研究者の一人です。オーソドックスなスタイルの研究に加えて、石器機能論、社会生態論などの理論や方法論を取り入れ、緻密な石器の観察に基づく独創的な論文を発表されています。また、長野県考古学会における活動をはじめとして、地域に根ざした研究が行われています。これらが評価されて、このたびの学会賞受賞となりました。2013年度にもセンター員の堤 隆氏が受賞しており、センター員の2年連続での日本旧石器学会賞受賞です。



写真1 授賞式での須藤隆司センター員（右側）
堤 隆センター員撮影

須藤隆司センター員の受賞コメント

私のような「自由」な研究者は、荣誉ある日本旧石器学会賞には相応しくないとと思いますが、研究を長年続けてきた「年寄り」の役割として頂きました。誠にありがとうございました。中学1年で石鏃を拾ってから石器研究一筋で45年。現在、激しい環境変動を生き抜いた「遊動型狩猟採集民」の歴史叙述を求めて、日本列島全域の旧石器を改めて「実見」しています。私の「自由」な研究を可能とするのは、実に多くの方々の協力の賜物です。感謝を申し上げるとともに更なる協力をお願い申し上げます。

2015年度スタッフ・組織

センター長： 小野 昭（明治大学研究・知財戦略機構特任教授）

副センター長： 阿部芳郎（明治大学文学部教授）

客員教授： 中村由克（明治大学研究・知財戦略機構）

センター員（50音順）

- 池谷信之（沼津市教育委員会）
- 及川 穰（島根大学法文学部准教授）
- 島田和高（明治大学博物館学芸員）
- 隅田祥光（長崎大学教育学部准教授）
- 須藤隆司（明治大学研究・知財戦略機構客員研究員）
- 諏訪 順（小田原市観光課小田原城天守閣館長）
- 大工原 豊（國學院大學兼任講師）
- 土屋美穂（明治大学研究・知財戦略機構特別嘱託職員）
- 堤 隆（浅間縄文ミュージアム主任学芸員）
- 橋詰 潤（明治大学研究・知財戦略機構特任講師）
- 藤山龍造（明治大学文学部准教授）
- 眞島英壽（明治大学研究・知財戦略機構特任講師）
- 山田昌功（明治大学研究・知財戦略機構特別嘱託職員）
- 吉田明弘（鹿児島大学法文学部准教授）
- 吉田英嗣（明治大学文学部准教授）

運営委員会

- 小野 昭 委員長
- 阿部芳郎 副委員長
- 大竹憲昭 委員（長野県立歴史館）
- 藤野次史 委員（広島大学総合博物館教授）
- 矢島國雄 委員（明治大学文学部教授）
- 浅川 光 委員（明治大学研究推進部長）

事務担当

河野秀美（明治大学研究知財事務室）

益田錦一郎（明治大学研究知財事務室）

2015年度スケジュール

	調査・研究	出版	関連学会・社会連携
4月		第四紀研究特集号：2014年大会「ボゾラムII 更新世・完新世の資源環境と人類」編集	
5月	長和町広原遺跡群考古・古環境調査 試資料整理・分析	原稿執筆	■ 日本考古学協会総会 ■ 地球惑星科学連合大会
6月			■ 日本旧石器学会大会
7月	ロシア文化調査	長和町広原遺跡群考古・古環境調査報告書 考察編執筆・報告書編集	■ XIX INQUA Nagoya
8月	ウラル・エルゼン遺跡地巡検・資料調査		■ 黒耀石のふるさと祭り ■ 日本第四紀学会大会
9月	オースタリア	ニュースレター発行	■ 日本地質学会大会 ■ 日本火山学会大会
10月			
11月			
12月	■ 文科省支援事業（大型研究） 成果発表・講演会	入稿・校正・印刷	
1月			
2月			
3月	■ センター運営委員会		紀要・ニュースレター発行

編集後記

黒耀石研究センターニュースレター第5号をお届けします。今号は紀要とは違った形で、センター員の活動状況をみなさんに知っていただくこと、センター員の国際会議や海外・国内での調査状況の報告を掲載させていただきました。黒耀石を一つの鍵として、信州鷹山の地から世界を視野に入れた研究を今後も発展させていきたいものです。

8月下旬からセンターのある鷹山には駆け足で秋が訪れようとしています。天気の急変もあり、冬の気候の厳しさが思い出されます。気候の良いうちにやれることはやっておかねば、そんなことを先史人も考えたのかなと思う毎日です。（HM）

明治大学黒耀石研究センターニュースレター 第5号

発行日：2015年9月15日

編集：眞島 英壽

発行：明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601

長野県小県郡長和町大門 3670-8

電話：0268-41-8815

URL: <http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷：中澤印刷株式会社

〒386-0002

長野県上田市住吉 1-6

電話：0268-22-0126

